

1 はじめに

2019年は、前年に産声をあげた「せいめい望遠鏡」が、いよいよ運用を開始し、共同利用を実施した1年目となりました。また、花山天文台が創立90周年を迎えて「財団法人花山宇宙文化財団」が設立し、教育普及施設として新しい運用を模索し始めた年でもあります。飛騨天文台では、前年の様な豪雨による自然災害もなく、太陽観測が順調におこなわれました。そして3月まで15年の長きにわたって天文台長として附属天文台を牽引してこられた柴田一成教授に替わって、私が天文台長を務めた1年目でもあります。2019年の附属天文台を簡単に振り返ってみたいとおもいます。

まず、せいめい望遠鏡ですが、前年7月に岡山県を襲った集中豪雨のため延期された「せいめい望遠鏡の完成式典・祝賀会」が、2月20日に岡山天文台と倉敷アイビースクエアにおいて盛大に行われ、せいめい望遠鏡の建設にご尽力された各界の方々から祝辞をいただきました。そして同月、待望の科学運用を開始し、2019年12月末までの期間に全国共同利用と京大時間を含めて、延べ62件(180夜)の観測がおこなわれました。稼働した観測装置は2次元ファイバー分光器(KOOLS-IFU)のみですが、出だしの観測から晩期型恒星のスーパーフレアを多数検出するなど、大いに期待膨らむ船出となりました。この間、多色撮像装置や高精度分光装置等の開発が京大内外のチームによって並行して進められ、これらの装置をナスミス焦点に搭載するための「装置ローテータ」の調整も着々と進められました。運用を始めた当初は、望遠鏡に様々な不具合が発生しましたが、それらの改修も逐次おこなわれ、より安定した運用にむけた努力が続けられています。

2016年に立ち上げられた「京都花山天文台の将来を考える会」を発展させ、4月に「一般財団法人花山宇宙文化財団」が設立されました。そして6月2日に「花山天文台創立90周年及び花山宇宙文化財団設立記念式典」が吉田キャンパス国際イノベーション棟で執り行われました。山極壽一京大総長、平島崇理学研究科長のお祝いと励ましの言葉に続いて、元京大総長の尾池和夫花山宇宙文化財団理事長、花山天文台に多額の支援をくださった株式会社タダノの多田野宏一社長から、花山天文台にまつわる大変興味深いお話をいただきました。10月には初めての試みとして、年に1度の特別公開を昼の部と夜の部の2日に分けておこなうことを企画しましたが、10月12日の夜の部は台風19号の影響で残念ながら中止せざるを得ませんでした。また、毎年おこなってきた野外コンサートにかかわって、11月24日に音楽家の喜多郎さん、岡野弘幹さん、祝丸さんに京大時計台ホールにお越しいただき、「花山天文台90周年記念音楽映像祭」を開催しました。当初、喜多郎さんと京大の両方にご縁の深い漫画家の松本零士さんにもお越しいただく予定でしたが、松本零士さんの急病によりご欠席となってしまいました。しかし零士さんからは心こもったメッセージをいただき、また喜多郎さんのサプライズ演出(歌手・高橋洋子さんの突然の出演)もあって、400人を超えるご来場の方々には十分楽しんでいただけたのではないかと思います。

さて、柴田一成前台長におかれては、アジア・太平洋物理学会連合傘下のプラズマ物理分科会より、プラズマ物理学の顕著な進歩に貢献した研究者と評され、8月に第6回チャンドラセカール賞に選出されました。柴田さんの太陽や宇宙磁気流体力学における先駆的かつ独創的な業績が高く評価されたもので、私たちとしても大変誇らしい話です。

2019年の附属天文台構成員の移動を記しておきます。岡山天文台では新しく研究員として磯貝桂介さんが4月に着任、花山天文台では市民への公開を推進するため、技術補佐員として河村聡人さんが10月、今谷恵美子さんと川端善仁さんが11月に着任し、花山天文台の新しい公開様式にむけた検討

を始めました。12月現在の附属天文台構成員は、常勤教員6人、常勤技術職員2人、特定教員4人、研究員6人、非常勤職員15人（内事務職員4人）、その他連携・協力教員8人と大学院生・研修生14人を合わせ、総勢55人になります。

令和3年(2021年) 1月25日
京都大学大学院理学研究科
附属天文台
台長 一本潔

2 沿革と主な施設整備年表

京都大学大学院理学研究科附属天文台は、花山天文台・飛驒天文台・岡山天文台により構成されている。

花山天文台は、大学天文台として日本で2番目、1929年にできた伝統ある天文台である。初代天文台長・山本一清教授の献身的な天文学普及啓発活動のおかげで、アマチュア天文学の聖地と呼ばれることもある。

飛驒天文台は、1960年代の山科地域の発展によって空が明るくなった花山天文台に代わる天文台として、1968年に創立された。太陽分光観測では世界屈指のドームレス太陽望遠鏡や、太陽全面H α 観測では世界最高性能を誇るSMART望遠鏡などを有し、太陽地上観測の世界的拠点の一つとして活躍している。

岡山天文台は、2018年に東アジア最大の3.8 m光学赤外線望遠鏡が完成し開設、ガンマ線バースト、スーパーフレアなどの突発天体や系外惑星の観測で活躍が期待されている。

昭和4年(1929年) 10月	花山天文台設立
昭和16年(1941年) 7月	生駒山太陽観測所(奈良県生駒郡生駒山)設立
昭和33年(1958年) 4月	花山天文台及び生駒山太陽観測所を理学部附属天文台として官制化
昭和35年(1960年) 3月	花山天文台に、60 cm反射望遠鏡完成
昭和36年(1961年) 3月	花山天文台に、現在の太陽館と70 cmシーロスタット完成
昭和43年(1968年) 11月	飛驒天文台設立、管理棟・本館・60 cm反射望遠鏡ドーム完工、60 cm反射望遠鏡を花山天文台より移設、開所式挙行政
昭和44年(1969年) 3月	花山天文台のクック30 cm屈折望遠鏡を改造し、ツァイス45 cmレンズを搭載
昭和47年(1972年) 3月	生駒山太陽観測所閉鎖
昭和47年(1972年) 4月	飛驒天文台に、65 cm屈折望遠鏡及び新館完成、竣工式挙行政
昭和54年(1979年) 5月	飛驒天文台に、ドームレス太陽望遠鏡完成、竣工式挙行政
昭和63年(1988年) 3月	飛驒天文台ドームレス太陽望遠鏡駆動コンピューター更新
平成3年(1991年) 3月	飛驒天文台ドームレス太陽望遠鏡塔体パネル一部修理工事完了、飛驒天文台15 mドーム駆動装置更新工事完了
平成4年(1992年) 3月	飛驒天文台に、太陽フレア監視望遠鏡及びドーム完成